

アスリートのセカンドキャリアに関する一考察

A study on second career of athletes

1K08B242-8

渡部 雄史

指導教員 主査 友添秀則 先生 副査 磯繁雄 先生

【序章】

本研究の動機

私は大学生活で現役を退くことを考えており、その先のことは全く決まっていない。セカンドキャリアについての意識も薄い。他の選手たちはどのようにセカンドキャリアを捉え、行動しているのか知り、また、どのようなセカンドキャリア支援がされているのか調べ、自分自身が直面しているこの問題について明らかにしたいと考えた。

【第一章】

スポーツの社会化

80年代頃より顕在化してきたアスリートのキャリア・トランジションをめぐる問題を検討するにあたり、スポーツ社会学領域の「スポーツ社会化(Sport socialization)」に関する議論に触れないわけにはいかない。三本松は、社会学プロパターの社会化研究とスポーツ社会学における社会化研究との関連性を理論的に検討していく中で、「多様化してきたスポーツ現象を分析するには、従来の概念装置では不十分であり、それらを解明するカギとなる概念が必要となってきた」と、社会化研究に対するスポーツ社会学独自の学問的要請を指摘している。多くの研究で述べられているように、この「スポーツ社会化」研究はケニロイ、インガムら北米スポーツ社会学の成果に依拠することが多く、また彼らによって二つの流れに大別されてきた。すなわち「スポーツへの社会化(Socialization into sport)」と「スポーツによる社会化(Socialization via sport)」である。前者は「スポーツに参加したり、好きになったりするのは、どのような社会的メカニズムにおいてか」に焦点を置き、後者は「スポーツによってどんな人間がつくられ、集団や社会等に対してどんな影響を与えるか」に焦点を置いたものである。

【第二章】

Jリーグのキャリアサポートセンター

(1)Jリーグキャリアサポートセンター設立の経緯

- ・1993年：Jリーグ開幕（当時は10クラブ）
- ・1996年：Jリーグ選手協会設立
- ・1999年：選手協会が選手を対象に行なったアンケート調査の結果

回答者の約8割が「引退後の生活に不安である」と答えている。

- ・2002年：選手協会とJリーグの共同プロジェクトとしてJリーグキャリアサポートセンターがスタートし

た。

(2)引退選手のセカンドキャリアの現状

①登録選手：約900名(外国籍選手約70名、平均年齢23.9歳)

②毎年約100名の選手が入り(高卒70%、大卒30%)約100名が出てゆく組織構造となっている。

③契約未更改選手の平均年齢は26歳で、20代が約7割を占めている。中でも20代前半での集中が見られ、プロとして2~4年目が選手継続の転換期となっている。

(3)現役選手のキャリアデザイン支援・選手のセカンドキャリア支援

キャリアサポートセンターは、「サッカー選手として、いかに自己実現するか」、「社会人としていかに成長するか」をテーマに現役選手に対しても、プロスポーツ選手としての在り方、また、一社会人としての人生設計を考える機会を提供している。インターンシップを希望する選手へのサポートなど、自らキャリアを高めようとする選手に対しサポートを行っている。

【第三章】

スポーツ振興基本計画

2000年に文部省（現：文部科学省）から告示されたスポーツ振興基本計画では「我が国の国際競技力の相互的な向上方策」において、トップレベルの競技者が安定して競技に専念できる環境の設備を図ることの重要性とともに「競技者の引退後への配慮」についても指摘している。

【結章】

このようなセカンドキャリア問題に対する政策は各組織には存在しているが、政府の対策としては存在しないことがわかった。日本も、スポーツの表面ばかりをクローズアップするのではなく、国をあげ、キャリア教育システムから見直す必要があるのではないだろうか。またアスリート自身のセカンドキャリアに対する意識の低さというを感じた。漠然として考え、あまり行動を起こしていないという印象を受けた。なぜ漠然とした考えしかできないのか。それは社会や一般企業に対しての知識がないため、なにをしたらわからないという考えからである。自発的に行動を起こし、問題に直面する前にスムーズに移行することが重要である。主体的にこの問題を考えることがもっとも重要だと考える。